

【私にとっての「縮小社会」】

農的生活—消費ダイエットと自給—

青野豊一

私は、人生の二毛作として、農業労働をしている。米五反、野菜2.5反、筍3反程度を栽培しているが、このような事をしているその理由を書く。

『社会運動』(NO418 2015年5月(市民セクター政策機構)の特集は、「消費ダイエットと自給のすすめ—使い捨て時代からの出口探し—」である。表紙には、NPO法人「使い捨て時代を考える会」の屋上菜園の写真が掲載されているが、「消費ダイエットと自給」は、これからの社会にとって目指すべき方向性を指し示していると思われる。

①まず消費者の意識変革を! 農業の在り方を大きく変えるのは、これしかない。

「何でも欲しい物を欲しいだけ食えると思込んでいるツツの消費者が加害者・・・。」

山下惣一『あてになる国のつくり方』井上ひさし、生活者大学校講師たち(光文社文庫)

ブランド品を買い求める消費をめぐる競争に、多くの人たちが駆り立てられている。消費を増やすためには、収入を多くするためにたくさん働かなくてはならない。でも、これは、「働き過ぎと浪費の悪循環」である。現代では、消費は時間との競争、利便性をめぐる競争となっている。宅配便は翌日に届き、即日配達のパイク便や自転車便さえある。24時間営業のコンビニは、バイトたちの細切れの(深夜)労働で維持されている。こんな消費生活をしては! * 森岡孝二(関西大学)氏の文を参照

* 徳野貞雄(熊本大学)氏による消費者の4類型

①期待される消費者 5.4% ・農産物の価値が分かり、それなりの金銭を支払って購入する	③健康志向型消費者 16.5% ・農産物の価値が分からないが、高価な物が体に良いと思ひ金銭を支払う
②分裂型消費者 52.4% ・農産物の価値が分かるが、その他の物や事に金銭を支払ってしまう	④どうしようもない消費者 23.0% ・食生活に注意をしない人たちで、ハンバァガーをコーラーで流し込んでいるような食生活をしている。

* 23%の食生活に注意をしない人たちへの対応策など、当面は考えないでよいであろう。現状の環境では、私たちが語りかけても、どうにもならない。

○「コシヒカリ」神話からの脱却、産地適作!

その地に適していない品種の作物は、作らないこと、食べない事である。香川の地で、特に平野部は、夏、瀬戸内海の影響で夜になっても温度が下がらない、風のない蒸し暑い寝苦しい日々が続く。このような気候では、私の暮らしている山間部とは異なり、米の「コシヒカリ」の品質は低下する。それなのに、あいも変わらず、「コシヒカリ」を求める消費者たちがいる。

○南瓜(カボチャ)の栽培を通して・・・賢い消費者になろう!

栗南瓜・恵比寿南瓜— 春に植えて夏に収穫 ・夏に植えて秋に収穫

南部南瓜— 春に植えて秋に収穫、来年の1月の末まで食べられる。

実が柔らかいので、スープに最適。煮物にするには、田の野菜が出来上がったころ、鍋の隅にいれて10分程度煮込むとよい。

万次郎— 春に植えて秋に収穫、来年の4月まで食べられる。

これを利用すれば、冬にエネルギーをたくさん使って輸入した外国産を買わなくてもよい。実が少し柔らかいので、短時間煮るか、バーベキュー等具材に最適。

○材料から献立を考える!!—貨幣経済からの影響を減らす—

献立を考えて買い物をするのではなく、今あるものでその日の献立を考えることができなくてはならない。季節の旬の物を使った料理をしようではないか。石油を燃やして栽培した冬のイチゴなど食べなくてもよいのだ。イチゴは、春に食べるものなのだ。筍(タケノコ)も春に食べればよいのだ。その他の季節は、欲しければ塩漬けた筍を食すればよい。旬の安い作物で、保存食を作り置きしようではないか。

私の家では、春はいろんな料理に筍を入れ、夏は朝・昼・晩にトマトを食べ、秋は栗ごはんや栗の入った茶わん蒸し等にして、冬は大根だらけの料理となる。



○労働時間の自己管理を、—そして、農的生活を!—

30分も郊外に出れば、そこかしこに放棄竹林や耕作放棄地がある。それを借りて野菜等を作りましょう。また、冬に管理竹林の整備を手伝え、春にはキャリーいっぱい筍がいただける。休日には、緑の光線に囲まれて身体がギシギシ痛む農業労働を、始めよう。「とても、できない。」と、背中を向けていては、何も始まらない。

でも、そのためには、「働き過ぎ」という生活から降りなくてはならない。総務省の「労働力調査」では、正規雇用者は一人平均年間2300時間を、男子だけでは2500時間も働いている。これでは、消費に唯一の楽しみを見出すことになってしまいかねない。一日8時間定時に退社して、週休2日、祝日15日、年休20日を実行すれば、労働時間は8時間×226日=1808時間となる。これだけで、現状より500時間も、そ

して 700 時間も減らすことができる。

社会の情報化が進み、オンとオフの仕切りがあいまいになってきているだけに、この切り替えが大切である。労働時間をきちんと管理してこそ賃金と健康の管理ができるようになり、生きがいをもって働き、家族内の役割を果たす事ができ、自分の夢の実現を図ろうとする意欲をもつことができるようになる。 * 森岡孝二氏の文を参照

自分の仕事の内容と責任の範囲が明瞭になっていると、サービス残業を止めると、もう一つの自分の可能性を意識することができる。そう意識した時、人は自由の感覚を意識できる。

②.遠隔地との取引をする商業的農業から、倒産しない農業経営へ!

単品の多量生産をして貨幣を獲得して、その貨幣で日々の食料を買い求める商業的農業(市場経済のみ)から、現金収入用の作物だけではなくして日々の生活に必要ないろんな物も栽培(自給)して、その余剰を知人・隣人・親せきと互酬的交換をしたり、近隣の人たちに「産直市」で販売する(市場経済的)農業形態へと転換しなくてはならない。こうすると、たくさんの金銭がなくても、十分生活できる。

山下惣一氏は、前掲の本で次のように述べている。

「農業の原理は進歩・発展ではなく、循環です。・・・大いなるマンネリと言っている。・・・農業の生産性が上がらないのは当然というより、むしろ健全さの証明なのです。」

農業が「大いなるマンネリ」? 私のしている農作業は、ちっともマンネリではない。自然を相手にした労働では、気象条件によって、土地の性質によって、することは毎年違ってくる。同じことをしては、品質と収量は大きく落ち込むことになる。

簡単にできると言われているサツマイモも、そんなことはない、手間と時間が必要となる。昨年の夏のように長雨があると、虫が多量発生してしまい虫食いだらけの芋となる。甘味が減り、長期保存ができないことになる。簡単にできる作物なんて、一つもないのだ。

筍栽培も、竹林ですること、毎年違うのだ。竹の伐採にしても、肥料のやり方にしても、同じことをしていない。同じことをできないのだ。だから、工場のように、決まった生産ラインなどとてもできないのは、あたりまえ。

